月刊

こころのとも

第十巻
五月号

義務とは

義務とは
反対給付無く
人を
助け
世話し
分け与えること
それを
自分の
生き甲斐として
行うこと

他力の蔓延

他力とは
自分の殻に
閉じこもり
居直る危険
含みたるもの

人生を考え直して
みたい人は（六四）

―『正法眼蔵』解説（八）―

現成公案を続けます。

たき木ははひとなる、さらにかへりてたき木となるべきにあらず。しかあるを、灰はのち薪（たきぎ）はさきと見取（けんしゅ）すべからず。しるべし、薪は薪の法位に住して、さきありのちあり、前後ありといへども、前後際断せり。灰は灰の法位にありて、のちありさきあり。かのたき木、はひとなりぬるのち、さらに薪とならざるがごとく、人のしぬるのち、さらに生とならず。しかあるを、生の死になるといはざるは、仏法のさだまれるならひなり、このゆゑに不生といふ。死の生にならざる、法輪のさだまれる仏転（ぶつてん）なり、このゆゑに不滅といふ。生も一時のくらゐなり、死も一時のくらゐなり。たとへば冬と春とのごとし。冬の春となるとおもはず、春の夏となるといはぬなり。

いつものように、参考までに玉城康四郎氏の現代語訳をあげておきます。

薪が燃えつきると灰となる。灰は再び薪にかえることはできない。それだからといって、薪は先で灰は後であると見てはならない。よく知るがよい、薪は薪のあり方として先があり後がある。前後はあっても、前後の跡かたは断ち切れている。灰も灰のあり方として後があり先がある。しかしかの薪は、灰となった後は、さらに薪とはならない。

それと同じように、人が死んだ後には、ふたたび生に帰ることはできない。しかし、生が死になると言わないのが、仏法の定まったならわしである。それゆえに不生という。また死が生にならないのも、仏説のさだめである。それゆえに不滅という。生も一時のありかたであり、死も一時のありかたである。たとえば、冬は冬、春は春である。冬が春になり、春が夏になるとは言わない。

この部分は、これまで結構、重要な部分とされてきたようです。たいして難しい言葉はないのですが、それだけに、理解が困難のようです。

たとえば、冒頭の「たき木は灰となる。もとにもどってたき木となることはない」ということは、誰でもがす

ぐ理解できると思うのです。現実の生活で、いつでも体験していることだからです。

ところが、そのすぐ後に出てきます「だからといって、灰は後、たき木は先と見てはならない」とは、どういうことなのか、これがとても理解困難です。普通は、薪が燃えて灰になるわけですから、時間的には薪が先で、灰がその後に続くことになります。それなのに、なぜ薪と灰に前後があると「見てはならない」と言うのでしょうか。

ここがとても分かりにくいところなのです。普通の論理では明らかに矛盾です。ものが燃えて灰になるといった物理現象に時間的な前後がないと考えますと、物理学は成り立たなくなってしまうと思えます。

こう考えますと、これは私たちが、「意識」している時に使う普通の論理ではない、ということになります。

そうなのです。これは、私たちの普通の意識を全て否定したところに起こる論理なのです。全てを否定するという絶対否定の後にやってくる、絶対肯定の世界のことなのです。ですから、その体験のない人には、理解できないことと言えます。ただ、道元は、それを言葉で表して、修行の動機を高めるために使っているのです。「これが未だ理解できないか」と鼓舞しているのです。（でもどの解説書もこれが理解できていないようですが。）

道元はかなり難しく説いていますので、少し道元から離れて、もっと分かりやすく私のモデルに即して解説してみたいと思います。

まず、意識の全てを否定（絶対否定）するということですが、道元で言えば、方法としては、ひたすら坐禅（只管打坐）することです。そうやってひたすら坐禅し、こころを磨いて行くとき、無意識に潜む「生きようとする力（生命蔵識・煩悩蔵識）」と「人を求め・愛そうとする力（如来蔵識）」とが、統合されてくるのです。そうなりますと（ここからは、信じて頂く以外にないのですが）、あらゆることが肯定できるようになるのです。たとえば、自分がどうしても受け容れることが出来なかった自分の過去やそのしがらみも全てが肯定できるのです。そして、自他の一体感をうることができます。あらゆるものが自己と一体であると感じることができるのです。また、そこでは時間を越えていて、永遠を生きていると感じることができます。これまでに、もうどれほど永く生きてきたか、分からないと実感するのです。それは、つまり、生死をこえている境地と言えます。ですから、そこには、死の不安は全くありません。

難しいかも知れませんが、このことをもう少し時間に

関連付けて言いますと、過去も未来も統合されてすべて現在になっているということです。存在的に言いますと、「今ここに、あるがままある」ということです。それを自分以外のこの世の存在に当てはめますと、すべてのものが、そうだということなのです。

さて、道元の文に戻りましょう。「薪は薪の法位に住して、さきありのちあり、前後ありといへども、前後際断せり」ですが、まず「法位」とは、右に述べましたように、自己の絶対肯定の意識の反映として、薪の存在の仕方がそうだと言っているのです。物理的な薪の存在に前後はあるのですが、その「前後が際断」しているのは、それが「今ここに、あるがままにある」からなのです。

次に、「かのたき木、はひとなりぬるのち、さらに薪とならざるがごとく、人のしぬるのち、さらに生とならず。しかあるを、生の死になるといはざるは、仏法のさだまれるならひなり、このゆゑに不生といふ。」の部分を取り上げます。

出だしの「薪は灰になって薪に戻らず、人は死んで生き返らない」というのは、当たり前の話です。でも、次の「生が死になると言わないのは仏法のならいであり、だからそれを不生という」というのは、絶対肯定の世界の話です。ですから、普通の論理では理解することはできません。普通は、生まれたら死ぬわけで、そこには、時間的な前後関係があります。死が先にあって、生が後から起こるわけではありません。なのに「生が死になると言わない」とは、分からないことです。

解脱を説く仏法では、前述の通り、生死を超越した世界を説きますので、生が死になるとは言わないのです。分かり難いかもしれませんので、もう少し、理屈を言いますと、人間は生と死の矛盾を、毎日、その矛盾の運動として生きているのです。ヘーゲルの弁証法で言いますと、「有」と「無」の矛盾を毎日「成」っていると言えます。どこまで成るかと言いますと、仏法で言いますと、仏に成るまでだと言えます。それが肉体生命の終末による成仏か、即身成仏かが異なるだけなのです。ですから、生が死に成るのではなくて、生と死の二つの契機で、人間は仏になると言えるのです。

ところで、「生が死にならざるゆえに不生という」とはどういうことなのでしょうか。普通の論理なら、それは、不生ではなく不滅となるように思えます。

ここでも、勿論、絶対肯定の世界のことを言っているのです。生と死を超越した絶対肯定の世界では、生も死も問題にならないのです。ですから、そこでは不滅も不生も同じことなのです。どちらでもよいのです。わざと

不生と言うことで、「それがわかるか」と道元は問いかけているのだと思います。

次に「死の生にならざる、法輪のさだまれる仏転（ぶつてん）なり、このゆゑに不滅といふ」ですが、もうあまり説明はいらないと思います。ただ、「法輪の仏転」だけふれておきます。仏教では釈尊の解脱直後の行動が話題にされますが、それに必ず出てくるのが、四諦八正道を説いた「初転法輪」と呼ばれる説法です。初めての転法輪というわけです。この転法輪は、法の輪を転がして衆生の迷いを破ることを言います。つまり、仏の説法のことを言うのです。

最後の「生も一時のくらゐなり、死も一時のくらゐなり。たとへば冬と春とのごとし。冬の春となるとおもはず、春の夏となるといはぬなり」に移ります。

一時の位とは、何のことでしょうか。前述の説明でいいますと、それは矛盾を含んだ弁証法的運動の一つの契機だと言えます。しかし、ここでは、それがヘーゲルの弁証法の単なる契機を超えて、絶対肯定の世界での話になっていることに注意しなければなりません。自らがその境地にいるということです。その時、生死が、はじめて一時の「位（法位）」と言えるのです。春も夏も秋も冬もみんな一時の法位なのです。

自作詩短歌等選

老後の不安

老後には
不安があると
団塊の
半数の人
なぜ言うか
こんなに豊かに
なったというに

中絶胎児再利用

医学界
中絶胎児も
リサイクル
どこまですすむ
人間のもの化

米国社会の崩壊兆候

アメリカじゃ
高校生さえ
銃乱射
人を人とも
思わない
人がたくさん
人の顔
かぶって社会
うごめいている

人間らしさの喪失

家庭崩壊
学級崩壊
学校崩壊
社会崩壊

その基礎にあるもの
人間の
人間らしさの喪失

合理主義とその帰結

人体を
物とのみ見る
合理主義
臓器移植を
生んだ元凶

大人のまね

少年の
飲酒・喫煙
増えていく

大人の真似を
早くから
すればするほど
健康を
そこねるだけぞ
未熟な大人よ

守れ！　不殺生戒

コソボでは
やったやられたと
殺しあい
直ちにやめよ
すべての暴力

検察官不適切発言

秀才の
検察官も
人の子か
いい歳こいて
いまさらに
おんな遊びが
活力だとは

子ども虐待禁止法

子ども二人を
両親は
車の中に
放置し
その車を盗んだ犯人は
そこから二十キロ離れた
ダム湖に
放り込んだ

日本も
ぼつぼつ
子どもの放置・虐待を
取り締まる
特別な法律が
いるのでは

明日は
子どもの日

義務の関係ない教育

日本の教育では
子どもに
権利だけを教え
義務を教えていない

それで
よく教育が
できるなあ
ふしぎの国
日本やなあ

だって
子どもも大人も
人間として「平等」や
お互いに
「自由」に意見を言い
みんなの意志は
多数決できめる
それが
民主主義なんだから

ただ
それに則って
教育しているだけさ
義務なんか
関係ないさ

自作随筆選

米国の倫理観喪失

日本経済新聞には「海外論調」という欄がありますが、五月三日のその欄に「倫理の指針失った米社会」という題の「ウォールストリート・ジャーナル」紙の記事が紹介されていました。私が、米国大統領の不倫騒動で書いてきたことと、趣旨が似ていましたので、ここで、その記事（の関連する部分）を紹介します。

コロラド州リトルトンでの銃乱射事件で一般に思いつくのは銃規制強化の必要性だ。だが、我々にはそれ以上のものが必要なのではないか。

米国は過去三十年、子供も含め何人も倫理的行動という考え方に縛られるべきではないという風潮にあった。その結果、今、この国に倫理はない。これで幸せだといえるのだろうか。

容疑者の高校生は「トレンチコート・マフィア」と呼ばれる集団に属し、インターネットでおぞましい内容の会話に浸っていた。これが事件に強く影響していることは疑いない。

米国文化、社会は倫理的な行動指針を失い、混とんとしている。最も傷つきやすい青年期の若者が「キレる」のも驚くに当たらない。（以下略）

私は、これを読んで、まさにその通りだと思いますが、しかし、果して、アメリカ人が、なぜこうなるのかをどれほど真剣に考えているのか、また、これが、どれほど切実な問題だと感じているのか、疑問だと思います。

でも、アメリカ人は、自分たちが倫理を失ったと思っているから、まだ救われるように思えます。日本に至ってはもっとひどいように思えます。先日も「朝までテレビ（？）」で学級崩壊のことをやっていまして、途中からですが見ていて、誰の意見も、ことの本質を理解しているとは思えませんでした。みんな好きなことをしゃべるだけで、言葉が空回りし、すりきれているように思えました。

もし、日本にアメリカほどに銃が氾濫していたら、もっともっと重大な事件が起きるように思います。オウム真理教でも、銃の製造工場を作り、量産に取りかかっていたのですから。

倫理も、規範も、道徳も、良心も、伝統も、慣習も、みんな「他己」をなすものです。「自己」に執着する民主主義が発達するほど、それらは失われていくのです。

釈尊のことば（八〇）

―法句経解説―

（二七七）「一切の形成されたものは無常である」（諸行無常）と明らかな智慧をもって観るときに、ひとは苦しみから遠ざかり離れる。これこそ人が清らかになる道である。

（二七八）「一切の形成されたものは苦しみである」（一切皆苦）と明らかな智慧をもって観るときに、ひとは苦しみから遠ざかり離れる。これこそ人が清らかになる道である。

（二七九）「一切の事物は我ならざるものである」（諸法無我）と明らかな智慧をもって観るときに、ひとは苦しみから遠ざかり離れる。これこそ人が清らかになる道である。

この三つの偈は、法句経の中でも有名なものです。それぞれ三つの主題である、諸行無常、一切皆苦、諸法無我、に続く文章は、皆同じです。

退屈ですが、少し仏教の言葉の説明をしておきます。この三つに「涅槃寂静（ねはんじゃくじょう）」を加えて、四法印（しほういん）と呼んでいます。法印とは、

法の要約、つまり仏教教理の特徴を表している印（しるし）という意味です。

この四法印から一切皆苦をとったものを三法印（さんぼういん）と呼んでいます。

順次、解説して行きます。

まず、「諸行無常」ですが、これは、『平家物語』の出だしの「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり」でも有名ですが、それは、あらゆる現象は変化してやまない、ということを意味しています。

この世に存在するものは、すべて、相対的で、有限で、時間的なのです。それは、この世のものが自分自身の中に自分の根拠（それは絶対・無限・永遠なもの）をもっていない、ということを意味しています。ということは、この世のあらゆるものが相互に影響を与え合いながら、「相（あい）対して」存在しているということです。ですから、つねに変化しています。弁証法的に言いますと、矛盾を含んで全ての存在が「時間的」に運動をしていると言えるのです。矛盾を含んでいますので、それぞれのものは「有限」ならざるを得ず、やがて消滅していきます。

人間で言いますと、その矛盾は、この世に生まれてきて、いつまでも生きていたいのに、やがて死んでいかなければならないことを自覚することに現れます。あるいは、自分ではなく、自分の子どもが自分より早く死んでしまうようなときに、逆縁と言って、この矛盾を強く感じてしまうのです。

実は、この諸行無常なる、矛盾を含んだ現象の意識への反映が、次の「一切皆苦」を生み出すのです。

私たちは必ず死ななければならないのに、死にたくないと自己の生に執着します。どこまでも生きていたいと思ってしまいます。それは、諸行無常であることを自分だけが逃れようとしていることになります。どんなに若くても死なない保障は誰にもないのです。生まれて数時間して死ぬこともあり得るわけです。

全く知らない他人がそうなっても、ほとんど悲しみや苦しみは起こりません。そういうこともあると客観的に判断することができます。なのに、自分のことになりますと、自分は、死んではならないのです。わが子も、生まれて、成長しないまに、死んではならないのです。

では、なぜ、そうなのでしょうか。私は、それを「自己」の無意識に宿る「生きる力（生命蔵識）」の意識への反映と考えているのです。

しかし、この生きる力は、ただ生や欲望への執着を生み出すだけではありません。自分の生きている意味を探

究し、限られた命だからこそ、より善い明日をめざして努力・精進しよとさせるものでもあるのです。そのエネルギー源となるのが、無常を無常と知らず、自己の思うとおりにしようとするときに生ずる苦しみなのです。ですから、苦しみのないところに、自己の生きている意味を見つけようとすることもありません。

私たちに死の苦しみを感じさす力は、私たち自身の中に宿っています。それが、矛盾なのです。生きているのに死へと自分自身で自分を誘（いざな）うわけです。

意識の世界では、自分では自由にしたいのに他者がいて自分の思うようにはなりません。サルトルというフランスの哲学者で作家の人は、恋人でさえ自分を否定する眼差しを自分に向けていると言っています。自己への執着が強まるほど、他者が自己を否定してくるのです。

こうしたサルトルの苦悩は、実は、意識や常識の世界のことなのです。もっと根本的な否定が自己の中に宿っているのです。それは、客観的に時間を刻む働きです。いやがおうにも、人は老化していくのです。世界中探しても二百歳まで生きた人はいません。たかだか百年そこそこまでも、多くの人は生きていられないのです。地球の命の五十億年に較べれば一瞬と言えます。その一瞬に人は、自分の中に宿した客観的に時間を刻む働きによって老化していくのです。自分によって自分が否定されていくのです。

そこには、自我が関わる余地はないのです。そのことが、次にあげてあります「諸法無我」なのです。これは、実は、最初に、なぜ諸行無常なのかを説明したときに、すでに、述べました。つまり、私たちを始めとするあらゆる存在が諸行無常なのは、自分の中に自分の根拠をもっていないからなのです。自己が空虚で、実体を持たないのです。だからそこに、具体的存在はすべて、自己を否定するものを自己の中に持たざる得ないのです。それは、私たちが、他者（人間を含めあらゆる存在）に依存してしか存在できない、ということでもあります。

その否定する力、つまり、私たちを老化させ、死へと誘う力は、自己へ執着するとき、そういう姿を現すわけですが、しかし、私たちがその執着を捨てるとき、実は、同時に、人を人に依存させる力、もっとポジティブな言葉で言いますと、人に人を求めさせ・愛させる力でもあるのです。それは、まさに、私たちを生かす大いなる力、仏教ですと如来さまの慈悲ですし、キリスト教で言いますと、神さまの愛、つまりアガペーと言われるものに当たるのです。そうしたものを私たちは自己の中に宿しているのです。

その力に触れるとき私たちは、安心立命、大安楽をうるのことができるのです。

ここで少し理屈っぽくなりますが、これまで解説してきました諸行無常と一切皆苦と諸法無我の関係についても述べておきたいと思います。これまでの説明でお分かりだと思いますが、諸行無常なのは、実は、諸法無我だからで、そのために私たち人間は、一切皆苦であると感じてしまうというわけです。しかし、諸行無常や諸法無我のお陰で、人間だけが、神や仏によって生かされていることを知ることができるということでもあるのです。

では、それはどうしたら知ることができるのでしょうか。そのことが、三つの偈の後段に共通して書かれていることなのです。

それは、「明らかな智慧をもって観るときに、ひとは苦しみから遠ざかり離れる。これこそ人が清らかになる道である」という部分です。

苦しみから遠ざかり離れるためには、明らかな智慧をもって見なければならない、ということです。ここで大切なのは、明らかな智慧です。

諸行無常と一切皆苦と諸法無我については、私の以上の解説で理屈としては、ご理解いただけたのではないかと思います。

でも、実は、こんなことを理屈として理解したからといって、ここでいう「明らかな智慧」で見たわけではありません。明らかな智慧とは、知識として理解することではないのです。現代の発達している科学は、すべてが、知識としての体系ですが、ここでいう智慧は、知識とは違うのです。

神や仏のような、私たちを超えた大いなる力をひたすら信じ、戒律を守って身を清め、坐禅やヨーガや読経などで、日々瞑想に勤める。そうしているとき、始めて得られるものなのです。それが最後にあります「これこそ人が清らかになる道である」ということなのです。そして、そのような「苦から遠ざかり離れ、清らか」になった心（精神）の状態を四法印にありましたように、「涅槃寂静」と言うのです。

仏教はこころ磨く修行を大切にします。人は、ただ信じただけでは、苦から真に救われません。それは、宗教の入口であり、前提条件であるに過ぎないからです。

信じたら、釈尊の説かれるように、修行しなければならないのです。こころを磨かなければならないのです。ここで取り上げています「法句経」も、私が書いていますこの解説も、すべてが、人が大いなる力を信じ、こころを磨く修行を動機づけるための方便と言えるのです。

後記

一、新緑がとてもすがすがしくなって来ました。

二、講読新聞を朝日から日経に変えました。朝日を一年継続講読する約束でしたが、新聞販売舗が同じだったので、頼んでみたところ日経でもよいとのことで、こうなりました。でも、購読料が五百円余り高くなるそうです。

三、二月号の後記で書きましたように、一月末に枸杞の木を見つけましたが、先月末に五十本ほど、挿し木をしました。

四、もとの木を見に行きましたところ、もう新しい枝が三十センチ余りも伸びていましたが、古い枝だけを切ってきて、十五センチばかりに切りそろえ、下の方の三ふしばかり完全に葉をちぎって、上は大きな葉だけをもぎ、とろ箱に鹿沼土を入れて挿しました。毎日、水をやっています。

五、また、一月に図鑑で調べるために折ってきた数本をもったいないと思い、コップにさして南向きの窓辺に置いていたところ、小さな葉が出、白い根が出ていましたので、それも植え変えましたところ、新芽がいっぱい出てきています。とても生命力が旺盛なのに驚かされます。

六、昨年度後期に、ゼミ生三人だけの授業だということもあり、『大乗起信論』を読みました。その時、私が思いつくことを解説しました。それを現職ゼミ生の一人の小川敦君が、その都度ノートをもとに書き起こしてくれました。それを今回、少し編集を加えてまとめ直してくれました。とても読みやすく、私が話したとは思えないほど、よくまとまっています。テキストにしました翻訳の『大乗起信論』のコピーと書き起こした解説のコピーを別々に綴じて、お配りできるようにしました。

七、まだまだ、書き出しの部分だけに終わっていますが、大乗仏教を理解して頂くのに、恰好の入門書になっているように思えます。ご希望がありましたら、お送りいたします。お申しつけ下さい。

月刊　こころのとも　第十巻　五月号　（通巻一一三号）

平成十一年五月八日
〒772―8502
徳島県鳴門市鳴門町高島
鳴門教育大学　障害児教育講座気付
（ひびきのさと　沙門）中塚　善成（ぜんじょう）

本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名　ひびきのさと　口座番号０１６１０―８―３８６６０